
相棒【お嬢には向かない事件】

みい×2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

相棒【お嬢には向かない事件】

【Nコード】

N3323G

【作者名】

みい×2

【あらすじ】

バラバラ殺人——凄惨な殺人現場で、気丈に振舞う鑑識課の宮本花音。そんな彼女を見守る捜査一課の三浦刑事。事件の解決は思わぬ展開に……。

Ⅱ 1 Ⅱ 惨状の現場（前書き）

ドラマ「相／棒」を下敷きにしたファンフィクションです
オリジナルキャラクターの鑑識・宮本花音が登場します。

Ⅱ 1 Ⅱ 惨状の現場

目も口も覆いたくなる、そんな惨状の現場だった。

言葉にするのもおぞましいが、男の部屋の中央に大きな血溜り――

――そして男の胴体。

胴体・・・というからには、頭部も手足もなかった。

「・・・ひでえことしやがる」

口癖になっている言葉だが、今回は本当に心の底から三浦刑事は思った。

現場をうろつく鑑識と捜査一課の刑事が、殆ど無言で仕事をしていった。

もちろん、鑑識も捜査一課も殺人現場には慣れているが、今回ばかりはさすがにまいっているのではないかと、鑑識の宮本花音に目をやる。

気丈にもいつもと変わらず、もくもくと仕事をしている。

「・・・さすが、お嬢ちゃんだな」

俺もしっかりしなきゃな・・・と思った。

「頭部、発見しました」

その声に振り向くと、部屋のベッドの下から男の頭部が発見されたところだった。

ホラーか？と思うほどの恐ろしい有様に、花音が卒倒しないか気になった。

こんなとき、やっぱり傍にいてやりたいと思ってしまうのは・・・三浦刑事だけではないようで、すでに伊丹刑事が花音の傍に行っていた。

その後、次々と、部屋中のいたるところから手足が見つかった。

——バラバラ殺人。

しかし、なんだか妙な感じがする。

花音は卒倒することもなく、部屋の外周から指紋などを調べて中央の血溜りで足を止めてじっと見つめていた。

「どうした？・・・お嬢ちゃん」

三浦が声をかけると、花音はつぶやいた。

「・・・何かある」

そしておもむろに、鑑識の米沢に声をかけて確認してから、血溜りにピンセットを入れた。

「・・・なんだ？」

真っ赤に染まった便箋のような物が現れた。

「何か・・・書いてあります」

慎重に取り扱いながら、証拠収集の為の袋に入れた。
息を殺しての作業だった。

「・・・一体、何でしょう」

背後から特命係の杉下警部の声がして三浦も花音も驚いた。

「警部殿・・・驚かさないでくださいよ」

「失礼。宮本さんがあんまり熱心に作業してらしたのですが、どうしても気になって・・・」

「・・・大丈夫ですよ。何か大きな意味がありそうな気がします、このままじゃ読みにくいので・・・一旦鑑識で調べてから報告しますね」

花音が素直に杉下警部に説明しているのが、三浦は面白くなかった。

「お嬢ちゃん、報告は俺らにしてくれ。」

特命係には報告することはないんだから、な！」

少し離れて、亀山刑事と伊丹との言い争いも聞こえてきた。

「それにしても・・・酷い惨状です」

三浦の声も周りの喧騒も聞こえてないように、杉下警部は部屋を見渡した。

「ええ・・・」

これには、三浦も花音も頷いた。

「この血の量・・・ここで死体を切り刻んだのでしょね。
それにしても・・・このバラバラにする意味はあったのでしょうか？」

「・・・普通、バラバラにするのは被害者の身元を分かりにくくするため・・・
見つかりにくくするため・・・もしくは、持ち運びに便利のように・・・
ですものね」

杉下の話に花音も加わるのが、さらに三浦には面白くない。

「困ります、警部殿。これは我々の事件ですので、お引取りを・・・
花音も・・・余計なことは言わなくていいから！」

三浦の苛立ちがわかったのか、花音は「はい」と返事して仕事に戻り、杉下も「それでは、失礼します」と一礼すると、まだ伊丹刑事といがみ合っている亀山に声をかけて現場を後にした。

Ⅱ Ⅱ みつからない（前書き）

宮本「鑑識の宮本です。前回までは・・・今回の事件はバラバラ殺人事件。凄惨な現場に血溜に浮かぶ便箋。一体どういう意味があるのでしょうか。そして今、鑑識の結果を届けに行くところです」

Ⅱ Ⅱ みつからない

被害者は青年実業家で、金も名声もあったためか女遊びもひどかった。

結婚してはいなかったが、女をめぐる諍いや、女同士のトラブルでかなり騒がれていたらしい。

「怨恨は・・・付き合っていた女のセンでいくか！」
捜査一課の面々は、それぞれ聞き込みに忙しい。

ドタドタと大の男たちが、捜査一課を後にしようとしたとき、鑑識の宮本花音がこの前の証拠についての報告に来た。

「あ・・・皆さん、おでかけになるんですね。」

この前の報告書、持参しました」

早口でいう花音に、三浦がまず立ち止まった。

「お、お嬢ちゃん、ありがとう。」

聞き込みに行くから、俺のデスクの上にでも置いていてくれ、な」
「はい」

ちよっと不満げな花音に、「なにか変わったことあったのか？」と聞こうとしたら、後ろから伊丹刑事がやってきた。

「花音、どうした？」

この強面の男から、こんな優しい声がでるのかと思う声に、三浦も驚く。

「あの・・・この前の便箋は、後でも目を通していただければいいのですが。」

検死結果でもご存知かも知れませんが・・・遺体の指が・・・まだ

見つかっていません！」

「ああ、そうだったな。

しかし、あれだけ切り刻まれた死体だ・・・指もその時」

「でも！・・・左手の薬指だけですよ？・・・何か意味があると思います」

「そうだな。お嬢ちゃんの言う通りだ！！

・・・そのこともよく考えて聞き込みに行くよ」

左手の薬指・・・愛の証の指輪を暗示している気がすると言
いたかった。

でも被害者は結婚も婚約もしていなかった。

なにか、伝えきれない思いだったが、三浦刑事はそんな何かしさを
汲み取ってくれたようだ。

安心して、捜査一課の聞き込み捜査を見送ると、花音は留守番しか
いなくなった捜査一課の三浦のデスクに報告書を置いた。

そして、その足で特命係に行く。

「おはようございます」

部屋には優雅に紅茶を飲む杉下警部とコーヒーを楽しむ亀山刑事が
挨拶をかえしてくれた。

「捜査一課は一斉に聞き込みに行かれたようですねえ」

何もかもお見通しかと思う、杉下の言葉に花音は頷いて、チョコ
ンと空いている椅子に腰掛けた。

「・・・はい。バタバタと・・・

私の報告書・・・いつ読んでくれるのかなあ」

「おや？この前の血溜りから発見された便箋について何かわかりましたか？」

杉下警部が、ミルクティーの入ったカップを花音の前に差出し興味深げに話しかけた。

「はい・・・これ、書いてあった内容の写しです。

・・・いただきます」

花音は便箋の写しをデスクの上に乗せ、ウエッジウッドのカップに口をつけた。

その便箋には、こう書いてあった。

『There was a man, a very untidy
man,
Whose fingers could nowhere be
found
to put in his tomb.
He had rolled his head far und
erneath the bed..
He had left his legs and arms
lying
all over the room.』

「えっ・・・英語お？」

亀山が一目見て素っ頓狂な声をあげた。

「マザーグースです、亀山君」

亀山をちらりと横目で見て、杉下警部が言った。

「・・・その通りです。日本語に直すと・・・

『一人の男が死んだ　とてもだらしのない男だった墓にいれようとしたがどこにも指がみつからない頭はベットの下に転がっていて手足はバラバラ部屋中にちらばっていた』」

「・・・怖いっすねえ。

マザーグースってもっと可愛いもんかと思っていた」

亀山の言葉に、杉下は説明する。

「まあ、言葉遊びからきているのですが、子供に読み聞かせる物語などにもこういう類のものは多いのですよ。怖い思いで子供の興味を惹きつけるのかもしれませんがねえ。
しかし・・・この詩、まるで今回の殺人事件そのものではありませんか？」

「・・・そうなんです。

頭部はベッドの下から発見されましたし、手足もバラバラで部屋中から出てきました。

そして・・・左手の薬指が、まだ見つかってません」

花音の言葉に特命係の二人も顔を見合わせた。

「・・・見立て殺人ですかねえ、右京さん」

「なににせよ、このマザーグースになんらかの関係があると見ていいでしょうね」

Ⅱ 3 Ⅱ 社長秘書（前書き）

杉下警部「前回までは・・・マザーグースに見立てたかのような悲惨な殺人現場・・・何か意味があるようです。さて、捜査一課は捜査に行き詰っているようですが・・・おやあ？」

Ⅱ 3 Ⅱ 社長秘書

捜査は行き詰っていた。

被害者の女関係は、とにかく激しかった。

女にだらしないという言葉で片付けるには簡単すぎるほど、女関係が複雑だった。

怨恨のセンでいくなら、全ての女が彼に敵意を持っていたといえるほどに。

また仕事関係者の間でも良い評判などなく、彼の周囲の人間は彼の死を喜んでいる面さえあった。

「つたくもう・・・なんて人間だったんだよ！」

「ほんとにねえ・・・俺、付き合ってた女の人に同情しちゃいましたよ」

伊丹と芹沢が聞き込み捜査の結果を話し合いながら愚痴を言った。

「まあ、これほど敵が多けりゃ・・・誰に殺意があってもおかしくねえな！」

老眼鏡をかけた三浦刑事が聞き込みに戻った関係者でめばしい人物をチェックしていた。

「あの・・・遺体の引き取りにお見えになってる方がいらっしやいます」

その知らせに家族が引き取りに来たのか？と聞くと、そうではないという。

被害者の親はすでに他界しており、兄弟はすでに被害者と縁を切っていて、遺体の引き取り拒否だという。

では、一体誰が引き取りに来たのか？というところ・・・

ひ弱そうな青白い顔の眼鏡の男がびよこんと一礼した。

「・・・被害者の会社の秘書だそうです」

「あの・・・社葬にしたいと思ひまして。

社長のワンマンあつての会社だったので、社長が亡くなられて・・・もう会社もおしまいです。

最後に・・・社葬にすることで、会社が立ち直るきっかけになるかもしれないし・・・

ならないとしても・・・社長は会社人間でしたから、その方が幸せだと思つて」

刑事を目の前に、しどろもどろに喋る男は何度もハンカチで額の汗を拭つた。

「・・・わかりました。

解剖も終わっているし、手続きが済めばお返しできると思ひますので・・・」

その場にいた伊丹刑事が丁寧に説明して秘書を案内した。

捜査一課に戻ってきた伊丹刑事は悔しそうに言つた。

「あんなひ弱そうな男でも結婚してんだなあゝくそ！

なんで・・・俺にはできないんだ」

「・・・それは性格の問題では？」

「・・・芹沢く・・・なんか言つたか？」

「いいえ……三浦先輩助けて」

二人のやりとりで呆れながら、今回は余計なことを言う芹沢も悪いとばかりに助け舟も出さず、デスクの上の鑑識の報告書に目を止めた。

「そうだ……お嬢ちゃんが言ってた報告書」

そこには、小さな字で書かれた英文が並んでいた。

「……なんだこりゃ……こんなの読めねえぜ」

老眼鏡を持ち上げ、三浦が再度報告書を見ようとしたとき、伊丹刑事の手が伸びてきた。

「……英語？」

「先輩！先輩！」

宮本さん、ちゃんと日本語訳もつけてくれますよ！

えっと……これは！！今回の殺人事件そのまんまじゃないっすか！」

被害者の秘書は警視庁を後にしようとしていた。

そこへ杉下警部が声をかけた。

「……社長さんの件、社葬にできそうですか？」

「あ……あなたは……さきほどの」

秘書の男は、警視庁入り口でウロウロしていたところを、杉下警部がどうしたのか声をかけて受付に頼んでおいたのだった。

「それが……社長の遺体に……」

「指が欠けているのでしょうか？」

「ええ・・・」

青白い顔の秘書は汗を拭って言った。

「やはり・・・ないと引き取りに問題があるのでしようねえ」

「それは・・・どうでしょう。事情にもよるかもしれませんが？」

「あの・・・警察は・・・会社の方も調べられたのでしょうか？」

「はいい？」

「会社の・・・社長専用金庫があつて・・・もしかしたら、そこにあるかもしれませんよ？」

杉下が男を不審そうな目でじっと見つめた。

「いえ・・・僕は・・・そう思っただけで・・・失礼します」

男は額を流れる汗をそのままに、逃げるように杉下の前から退散した。

「秘書というのは・・・なんでもよくご存知なんですねえ」
慌てる男を見送りながら、杉下警部の目が光った。

Ⅱ 4 Ⅱ 隠し金庫（前書き）

伊丹刑事「前回までのあらすじ・・・捜査は完全に行き詰まっていた。バラバラにされた被害者の遺体を引き取りに来た社長秘書の男。その男が何か言っていたというが・・・事件解決につながるか？」

Ⅱ 4 Ⅱ 隠し金庫

「え・・・？会社に社長専用の金庫？」

「ええ・・・ちょっと小耳に挟んだものですから」

「鑑識連れて行くぞ！！」

杉下警部の一言で、捜査一課と鑑識が被害者の会社駆けつけた。勿論、この会社には聞き込みには来ていたが、それほど怪しい物などなく社長専用の金庫など初耳だった。

「社長専用の金庫？・・・専用っていうか、まあ社長だけが管理してたので、ある意味そうでしょうね」

社員の一人が言った。

「わ・・・私が、ご案内します」

遺体の引取りに來た秘書が出てきて、社長室へと案内した。

会社は滑らかな曲線を描いた未来型のオフィススタイルなのに、社長室は威厳ある造りになっていて、黒塗りの重厚な机と毛足の長い絨毯と壁に掛けられた書が威圧的だった。

「で・・・金庫は？」

「社長は・・・用心深い方だったので・・・隠し金庫になっております」

そう言うと、秘書は壁の書を外し、その下の木の出っ張りを押した。

ストーン　という音がして、壁の一部が下にずれた。

書が掛けてあったあたりに金庫が現れた。

ひとまず鑑識が周りの指紋を採取した。

「金庫はどうすれば開くのですか？」

鑑識の宮本花音が秘書に尋ねた。

「・・・・・・社長の指紋です」

秘書の答えに、その場にいた捜査員がざわめいた。

鑑識は採取した被害者の指紋を金庫に照らしてみたが・・・・どれも外れだった。

「こうなると・・・・残りは左の薬指しかねえな」

鑑識の仕事をじっと見ていた伊丹刑事がつぶやいた。

「金庫を開けないことには、話になりませんし・・・・仕方ないですね。」

もし良ければ、この金庫こじ開けさせていただいても構いませんか？」

花音が乱暴なことを言った。

「構いません！！社長が亡くなった今、この部屋を管理する権限は秘書である私にあると思います。」

もし、開けることができるなら、その方が社長への供養になるかと・・・・」

この時ばかりは、頼りない秘書もハキハキと喋った。

花音は力強く頷くと、鉄具を取り出した。

「いや、お嬢ちゃんには無理だろ」

三浦刑事が見ていられないとばかりに、花音の手から鉄具を受け取

る。

「三浦さん?・・・大丈夫ですよ」

「いや、ここは俺たちに任せとけて、な?伊丹」

ふいに声をかけられ「おう」と腕まくりする伊丹刑事。

二人で頑丈な金庫の隙間に鉄具をこじ入れ、フンツと踏ん張った。
バキッ

嫌な音をさせて、金庫は少し歪んだが、まだ開けられない。

「三浦さん、伊丹さん、ありがとう。」

でも、ちよつとコツがあるんで・・・貸してください」

そう言つて、にっこり笑うと花音は鉄具を金庫に差込み、鉄材を間に噛ませて力を込めた。

バキョッ

金庫の扉がひしゃげ、あとは皆で寄つてたかつて金庫を分解した。

「・・・やるなあ、お嬢ちゃん!」

疲れた顔で言う三浦に花音は笑ってみせた。

「テコの原理ですよ。私でも力仕事はできるんですから!」

得意げに言う花音に、「そうだな」と三浦は笑った。

「ったく・・・三浦は花音を過保護にしすぎるんだ・・・」

伊丹刑事も後ろでブツブツ言っていた。

そして———今、金庫は開いた。

中には・・・変色した指が転がっているだけだった。

Ⅱ 5 Ⅱ 取調べ（前書き）

芹沢刑事「前回までのあらすじ・・・被害者の会社の隠し金庫の中には・・・被害者の失われた一部があった。なにもかも知りすぎている社長秘書の男を捜査一課は取り調べることにした。そんな感じですかね？先輩」

Ⅱ 5 Ⅱ 取調べ

「・・・あんだ、金庫のこと知ってたな？」

取調室で、社長秘書の男を目の前にして、いつもよりいっそう怖い顔で伊丹刑事が問い詰めた。

「・・・隠し金庫のことは・・・知っていました」

「中に何があるかも知っていた・・・」

「それは！・・・知りませんよっ！私も驚いたんですから！！
だいたい・・・私に社長を殺す理由があるっていうんですか？」
社長秘書が必死になって甲高い声で言った。

「あんだ・・・犯行時間のアリバイがねえらしいな」

「だって・・・深夜ですよ？寝てるに決まっています！」

私以外にもこの時間にアリバイない人いっぱいいるでしょう？」

「でもなあ・・・あんだは家族とも別に暮らしてるらしいし・・・」

「妻とは別居中で・・・でも、この場合家族の証言もアリバイ証明にならないでしょう？」

伊丹刑事と社長秘書とのやりとりをじっと聞いていた三浦刑事が静かに聞いた。

「で、もともと・・・あの金庫には何があったんですか？」

「・・・よく知りません。

でもお金ではないです。

会社のお金を一時預かる金庫は別にありましたので・・・
社長の・・・個人的な物だったようで、社内でも知ってる者はいな

「います」

「それを、なんであんたは開け方まで知ってたんだ？」

「・・・秘書ですから」

「でもねえ・・・社員の皆さんは、その金庫の開け方までご存知の方はなかなかいらっしやらなかったようですよ」

「・・・」

三浦の追求に、社長秘書は一瞬黙った。

「・・・社長の女は知ってたかもしれませんが。」

「・・・特に気に入った女には隠し金庫のことを酒の勢いで喋ってましたから」

「もちろん、その女性にも話は聞きますよ」

取調べの一部始終を見ていた特命係の二人と鑑識の宮本がマジックミラーの向こう側にいた。

「・・・おや？宮本さん・・・珍しいですね」

「なんだかこの事件、気になって・・・」

「僕もです」

「あ、俺もです」

とってつけたような亀山の言葉に杉下と宮本花音は笑った。

「で、杉下警部は・・・彼が犯人だと思いますか？」

「どうでしょう・・・現時点では、極めて疑わしいですねえ」

「そうですよね！・・・殺人の動機はわかんないけど、いろいろ知りすぎているし、変ですよえ！」

亀山の言葉に宮本も杉下も頷いた。

「そうなんです。動機が・・・わからない」

「しかも、マザーグースの詩など・・・解けてない謎が多すぎます」

「知りすぎている・・・という理由だけで逮捕できませんからねえ・

・
家宅捜査などで何か証拠が出れば話は別ですが・・・まずこの謎を
解明しないと先に進めません」

杉下警部は、金庫から見つけた社長の指についての報告書を花音
から受け取ると、ざっと目を通した。

「・・・ここ、気になりますか？」

杉下が指差した写真の部分には被害者が生前に付けたと見られる鬱
血した後が指関節近くにあった。

「なんだ？・・・これ」

亀山刑事も首を傾げる。

「・・・もしかして、指輪の跡じゃないでしょうか？」

まだマジックミラー越しに社長秘書を見つめたままの花音が言った。

「指輪？・・・花音ちゃん、被害者は結婚も婚約もしていなかった
んだよ？」

亀山が言った。

「・・・亀山さん、指輪は何も結婚したからといってつけるものじ
ゃないと思いますよ。」

愛の証ですから・・・

本当に心から好きな人がいれば・・・その証に指輪をしてもいいと
私は思うなあ。

もちろん、その時のために左手の薬指は指輪をしないという人もいらっしゃるでしょうけど」

微動だにしないで言う花音の目の先には・・・社長秘書の左手薬指に光るプラチナの指輪があった。

その目線に気付いた杉下警部は、ふっと笑った。

「宮本さん、あなたもなかなかの勘の持ち主のようですね」

そして、颯爽と部屋から出て行った杉下警部は、取調室に入っていた。

「・・・右京さん！」

慌てて亀山刑事も追いかけていった。

Ⅱ 6 Ⅱ 真相（前書き）

亀山刑事「前回までのあらすじ・・・容疑者の社長秘書の男を取調べ中に、何かを思いついた右京さんが飛び出して行った。いよいよ真相が明らかに・・・」

Ⅱ 6 Ⅱ 真相

「・・・ちよつとよろしいでしょうか？」

いつもそうだが、突然の杉下警部の乱入に捜査一課は頭を抱えた。

「警部殿」

「・・・ちよつとよろしくねえんだよ」

思わず文句を言ってしまう、三浦と伊丹。

そんなことにはお構いなしで、杉下は話を続ける。

「あなたのその指輪・・・サイズが合っていないような気がするのですが？」

社長秘書の左手薬指に光る指輪は、男には大きかった。

「・・・そんなこと、ないです・・・痩せたんです、私」

「そうですかあ？それにしても・・・今にも抜けてしまいそうです
が」

そう言った杉下が、おもむろに男の左手をとると、するりと簡単に指輪を抜いた。

「あ！！！何するんですか！！」

「・・・失礼。でも、やはり簡単に抜けてしまいましたねえ・・・」

「か・・・返してくださいっ！！怒りますよ！！」

「これは失礼。」

お返しします・・・おや？内側にイニシャルが彫ってある・・・M・K？」

社長秘書は必死に杉下から指輪を取り返すと、用心深く今度はポケ

ットに入れようとした。

その手を伊丹刑事が止める。

「・・・M・K?・・・あんたの奥さんのイニシャルじゃないようだな?」

「あんた・・・自分のイニシャルか?」

「ご自分のイニシャルが入った『愛の証』ですか・・・?それとも、あなたに『愛の証』を誓った誰かの物とか? サイズも合ってますし」

男は黙っていた。

「ルミノール反応というものをご存知ですか?・・・血液に反応して光るんですが。」

それを、この『愛の証』にさせていただいてもよろしいんですか?」

杉下の言葉に無反応に俯くだけの男に業を煮やした、マジックミラーの向こう側の宮本花音が取調室に入った。

「鑑識の宮本です」

「お嬢ちゃん!! 取調べ中だぞ!」

思わず三浦刑事が声を荒げた。

「鑑識から、一言いわせていただきたくて・・・」

いくら洗ったからといって、ルミノール反応は出ます!!

だから・・・『愛の証』を汚さないで・・・正直に、お願いします!」

花音の言葉に、社長秘書の瞳から涙がこぼれた。

「・・・私が、社長を殺しました」

涙まじりの声で、社長秘書は犯行を認めた。

「もともと・・・社長と私は愛し合っていました。

しかし、社長はあの性格で、さまざまな女性とも関係を持っていた、でも最後には私のところに戻ってきてくれました。

私は偽装結婚していたのに、社長は私のために一生結婚はしないと誓ってくれました。

・・・それなのに。

数日前から指輪をするようになりました。

あまりに女性が近寄ってくるから『女避け』だなんて笑っていましたが、本当に好きな女性ができたにちがいないと確信しました」

震える声で真相を語る男が、ここで一息ついた。

つぎに口を開くのが辛そうだったので、杉下が口を挟んだ。

「・・・でも、それは思い違いだったのですね。

社長さんは、あなただけを本当に愛していた。

それをなかなかあなたに上手く伝えられなかったようですから、不器用な人だったのかもしれませんがね。

社長さんは、あなたへの愛を指輪にして形にしたかった・・・」

「それを・・・私は他の女に対する嫉妬で、妙に勘ぐってしまった。そして、あの夜・・・口論になった私は、勢いあまって彼を殺して

しまった。

彼の左手に光る指輪が憎くなりました・・・なんとしても抜き取りたかった。

でも、彼の関節は節が高く・・・なかなか苦勞しました。

諦めて、切断してから指輪を抜き取りました・・・でも、そのイニシャルを見て驚きました。

彼の付き合っていた女の名前でなく、私の名前が彫られていたのですから」

「あんた、馬鹿じゃねえのか！・・・その男のこと好きだったなら、最後まで信じてやりやよかったじゃねえか！」

亀山刑事がたまらなくなつて口を挟んだ。

「・・・本当にね・・・いつもそうしていたのに。

何故でしょう・・・あの時は、魔がさしたとでもいうのでしょうか・・・

私の心にも悪魔が棲みついているのだとわかりました」

「その後、あなたは指を切り取つて指輪を抜いたことを知られないために『マザーグース』の詩になぞらえてバラバラにしたのですね」杉下の言葉に、男は素直に頷いた。

「でも・・・ちょっと違うかもしれません。

指輪を抜いたことを隠すためでなく・・・この指輪が私への『愛の証』だと知れないために指輪の存在を隠しておきたかった。

そして、私と彼だけの秘密にしたかったのです。

ワンマンだった社長が、男の恋人もいたなんて知られなくなかったし・・・この秘密を最後まで彼と共有したかったのかもしれない」

男はきゅっと指輪を包み込むと愛しそうに抱きしめた。

「・・・あなたはそれで満足かもしれませんが、その愛は本当にお二人で共有したかった愛ですか？

・・・彼をこんな風に殺してしまっ、その愛の証まで取り上げて！！

これは、あなたの自己満足なんじゃないんですかっ！」

声を震わせた杉下警部の激昂が取調室に重く響いた。

犯人は「すみませんでした」と泣き崩れた。

Ⅱ 7 Ⅱ 職域（前書き）

三浦刑事「前回までのあらすじ・・・あっけない形で事件は解決した。今回、お嬢ちゃんにはいろいろな活躍してもらったが、無理してなきやいいがなあ」

Ⅱ 7 Ⅱ 職域

こんこん

捜査一課の扉を小さくノックする者がいた。

いつもの三浦、伊丹、芹沢が振り向くと、入り口に鑑識の宮本がちょこんと立っていた。

「お嬢ちゃん、どうした？・・・入って来いよ」

三浦刑事が手招きし、花音は遠慮がちに三人の近くに来了。

「花音、どうした？」

伊丹刑事が、花音のいつもと違う緊張気味の顔色を伺いながら優しく声をかける。

「あの・・・取調室では失礼しました」

「ああ・・・」

「そのことか」と三浦も伊丹も「気にするな」と手を振った。

「皆さんは、皆さんの仕事をしてるのに・・・

私、職域を侵してしまいました」

ぺこんと頭を下げる花音の頭を、思わず三浦は撫でてしまった。

「気にするなって・・・な？お嬢ちゃん。

まあ、本来俺たちの仕事に口出ししてもらっちゃ困るが、あの場はあれで収まったと思うぞ」

そんな三浦から花音を遠ざけようと伊丹は花音の肩を持ち、身体の向きを変えさせて励ました。

「そうだ。

花音の一言で、あいつも喋る気になったんだし！
もう気にするな！」

「だいたい・・・せっかく宮本さんが教えてくれた情報を活かしかれなかった俺たちが悪いんですから、ね？

三浦先輩？伊丹先輩？」

暢気に笑う芹沢を、二人は叩きつつ、花音のご機嫌をとろうとする二人。

「ま・・・芹沢の意見も一理あるか。

俺たち捜査一課と鑑識は持ちつ持たれつだろ？

これからもよろしく頼むぜ？・・・な」

「花音、元気出せよ、な？」

二人の言葉に、やっと前を向いた花音が「はい」と元気よく返事した。

やっといつも通りの笑顔を見れたと安心した伊丹が言葉を続ける。

「だいたい、特命係なんかみろよ」

あいつらこそ職域ってものをわかってねえと俺は思うぞ！」

「そうだ、な！杉下警部なんて、どっからどこまで仕事か？個人的興味か？

わけわかんねえ思考回路してるし、な！！」

いつのまにか杉下警部の悪口になってしまった三浦の背後から、あの理屈っぽい声が聞こえてきた。

「おやあ？三浦刑事・・・

僕はそんなに訳のわからない思考回路なのでしょうか？」

「おわっ！！！！警部殿！・・・一体、なんの用ですか？」

「いえ・・・鑑識の宮本さんの様子がおかしいと米沢さんからお聞きして・・・」

廊下でしょんぼりと歩いている彼女を拝見したものですから、何処へ向うのかと個人的興味で後ろを付いてきてしまいました」
のうのうと言ったのけた杉下警部に皆呆れた。

「え・・・杉下警部、私のあとを付いてきてたんですか？」

驚く花音に、杉下は「ええ」と笑顔で答えた。

「警部、一步間違えればストーカーですよ！」

伊丹刑事が嫉妬半分で杉下を脅した。

「それは・・・気をつけます。」

でも、元気そうな宮本さんの笑顔を見れたので良かったです。
・・・それと、特命係は特別に命令があればという意味なので・・・
職域はどこからどこまでなのか計り知れませんねえ」

そう言うと、伊丹や三浦に何も言わせぬうちにその場を去った。

「まったく・・・あの人は」

「しょがねえなあ・・・」

その場の空気が一変したが、三浦刑事は真面目な顔で花音に向き合うところと言った。

「今回、お嬢ちゃんには向かない事件だ——なんて思っていたが、そんなことなかったな。」

お嬢ちゃんが居たから、解決できた事件かもしれない。
これからも鑑識のお嬢ちゃんを頼りにしてるから、な！」

その褒め言葉が、花音には何より嬉しかった。

Ⅱ 7 Ⅱ 職域（後書き）

あとがきです。最後まで読んでいただきありがとうございます。今回は、三浦さん視点で・・・と意識しつつ書いてみたのですが、楽しんで頂ければ幸いです。少し残酷なシーンがあったのですが、大丈夫でしたでしょうか・・・心配。ご感想・ご意見お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3323g/>

相棒【お嬢には向かない事件】

2010年10月8日23時58分発行